

CONTENTS

Opening essay:
Comparing Taiwan Strait Crisis with Senkaku Crisis: Between Peace and War
[*Yasubiro Matsuda*] — 00

Faculty Papers

Career paths of graduate students and postdoctoral fellows at the National
Core for Neuroethics, the University of British Columbia, Canada.
[*Osamu Sakura*] — 00

The circumstances leading up to literary systems studies in the English-speaking
world: B. Clarke's constructivist view of literature
[*Nami OHI*] — 00

Refereed Papers

From Paretian Sociology to Socio-Informatics.
[*Yasuyuki MURADATE*] — 00

The perceptions of ELSI researchers to Brain-Machine Interface:
Ethical & social issues and the relationship with society.
[*Taichi Isobe*] — 00

On Bernard Stiegler's "orthothesis":
Repositioning Husserl's phenomenology technologically
[*Kanta Tanishima*] — 00

American Photographs and the 1950s:
Reading The Americans from Kerouac's "Introduction"
[*Yuta Kaminishi*] — 00

Field Review

Information and Communications Policy
-Two Turning Points and Future Issues-
[*Yoshikazu Okamoto*] — 00



情 報 学 研 究
JOURNAL OF INFORMATION STUDIES

学環

思考の環

台湾海峡危機と尖閣諸島危機——戦争と平和の間で [松田康博]—— i

教員研究論文

カナダの大学院生および博士研究員のキャリアパスについて [佐倉 統]—— 1
——ブリティッシュ・コロンビア大学 脳神経倫理ナショナル・コアの場合——

英語圏文学システム論の一前史 [大井奈美]—— 21
——B. クラークによる構成主義的文学観——

査読研究論文

パレート社会学から社会情報学へ [村館靖之]—— 35

ELSI 研究者のブレイン・マシン・インターフェースへの認識 [磯部太一]—— 47
——倫理的・社会的問題と社会との関係について——

ベルナル・スティグレルにおける「正定立」の概念をめぐって [谷島貫太]—— 65
——フッサールを技術論的に捉え返す試み——

アメリカ写真と 1950 年代 [上西雄太]—— 83
——ケルアック「序文」から『ジ・アメリカンズ』を読む——

フィールド・レビュー

情報通信政策論 [岡本剛和]—— 99
——二つの転換点と今後の論点——



思考の環

OPENING ESSAY

台湾海峡危機と尖閣諸島危機——戦争と平和の間で

大失敗

「戦争と平和」はこれまでずっと国際政治学の最大の課題であり、今もそうである。私の研究している中国と台湾は、長く軍事的対立を続け、近年は経済関係が深まっているものの、指導者同士の会談などはまだ行われていない。

最近よく思い出すことがある。1995年5月、マカオで行われたある国際会議で——それは私が29歳で初めて参加した国際会議だったが——私は「今年は中台関係が大幅に改善される一年になるだろう」と発言した。その約2カ月後、中国は台湾の周辺海域に弾道ミサイルを撃ち込んだ。いわゆる「第3次台湾海峡危機」の幕開けである。中国はその翌年3月に行われた台湾初の民選総統選挙までの間、弾道ミサイル試射や上陸演習を含む三軍合同演習で台湾に軍事的圧力をかけた。

いやはや、ひどい読み間違いである。私は東アジアの国際政治を研究している。当時駐香港日本国総領事館で専門調査員（客員研究員）をしていた私にとって、現状分析は生業であった。大学院で政治史研究の訓練を受け

戦争か？平和か？

突然態度を変えた中国は、台湾との準公的交流を一方的に中断した。そして中国は「李登輝は祖国を分裂させようとしている」という非難を始め、あらゆるメディアを使って李登輝への人身攻撃を行い、台湾をターゲットとした軍事演習を繰り返した。そして中国系メディア

た私は、文献を読みこなすことに関しては、ある程度の自信があった。そして、私は1995年の前半に、対立を続けてきた中国と台湾の指導者が、はじめてメディアを通じて話し合いの呼びかけを行ったことに注目した。それまで、あらゆる文献資料が関係改善を示唆していたのである。

6月に台湾の李登輝総統が訪米したときも、中国は反対したとはいえ、過剰な反応を見せなかった。李総統は母校のコーネル大学で“Always in My Heart”と題し、民主化を推進した心のうちを語る歴史的な演説を行った。中国の反応も軽微であり、全てがうまくいっていたように見えた。台湾側は、李登輝訪米を事前に直接中国の高官に伝えていたが、大した反発を見せなかったという。それなのに、李が台湾に戻ってから約2週間経って、突然台湾近海を標的としたミサイル試射の予告がなされた。その前日まで、中国共産党の機関紙『人民日報』は台湾との交流の重要性を強調していたのに、である。

は、「平和統一政策」が打ち出された1979年以来、初めて台湾への武力行使を示唆し始めたのである。

「台湾海峡で戦争が起こるのか」が焦点になった。不幸なことに当時の香港に軍事に詳しい日本人はいなかった。私は出身が防衛庁防衛

研究所であったため、軍事専門家と勘違いされ、いろんな質問が集中した。1995年夏のある日、日系投資信託会社の昼食会で、中国事情の解説を頼まれた。そこで出た質問が「私たちだけで17兆円運用しています。ここで戦争が起こると半分くらい消えてなくなってしまいます。松田先生、戦争になりますか？」というものであった。

マカオでの大失敗が頭をよぎったが、私は「中国は戦争を望んでいません。中国は台湾への『主権』を強調し、台湾が自分のコントロール下に入るよう、脅しを掛けているだけです。また中国はアメリカの反応も試しています。アメリカが全く介入せず、台湾が孤立し、中国の威嚇が有効に働くよう計算しています」という主旨の返答をした。「もう逃げられない。まさに今自分は試されているんだ」と身震いしたこ

関係改善と悪化のサイクル

その後、中台関係は、「1つの中国」をめぐって長期に渡る対立関係に陥った。中華人民共和国は台湾を中国の一部だと主張し、台湾は「台湾にある中華民国」は中華人民共和国の支配下に入ったことはないとして中国の主張をはねつけた。

今度は、「中台は関係改善をするのか」が問題となった。台湾の政権幹部は、「台湾は絶対に妥協しない。中国が武力による威嚇をして、台湾が妥協したら、誤ったシグナルになる。今後中国との関係がこじれるたびに中国内部の強硬派を呼び覚ますことになる。中国国内の穏健派が政策決定の権限を取り戻すまで待つ」と主張していた。他方中国は、ここまで拳を振り上

とを覚えている。

結局、中国は軍事演習を繰り返し、翌1996年3月23日に行われた初めての総統直接選挙に合わせて台湾を軍事的に占領することをイメージした三軍合同上陸演習などを含む一連の軍事演習等を行い、中国は台湾に圧力をかけ続けた。ただし、その一方で中国は米国に特使を派遣して、武力行使の意図がないことを伝えた。

中国は米国が介入しないことを期待したが、米国は甘くなかった。戦争はしないと断言しつつ台湾への軍事的圧力を続けた中国に対し、2個空母機動部隊を台湾近海に派遣するなどして、台湾防衛の姿勢を見せたのである。民主化の総仕上げとなる初めての総統直接選挙は、中国の「お陰」で世界的な注目を受け、その結果中国が最も嫌う李登輝が、米国の庇護の下で総統に選出されたのであった。

げてしまったため、落としどころが見つからなくなってしまったのである。

中国は「急がば回れ」とばかりに、1997-98年に米国との関係改善を先行させ、米国経由で台湾に対話回復の圧力をかけるようになった。同時に1997年秋の中国共産党の党大会の際に台湾向けに関係改善のシグナルを送り、翌年には中台間の準公式枠組みのトップ会談が回復したのである。

しかし、1999年には、米中接近に不満を抱えた李登輝総統が、中台が「特殊な国と国との関係」であると発言したことをきっかけに中台関係は再度緊張した。さらに2000年には台湾独立派の野党指導者、陳水扁が政権についたこ

とで、この緊張関係は常態化したのである。ただし、この緊張関係のベースの上で、関係の改善や悪化は繰り返された。中国は、台湾が公民投票の実施など、中国が一方向的に引いたレッド

ラインを踏み越える行動に出た時も、武力行使には踏み切らず、結局中台間の戦争は起きなかったのである。

歴史研究と現状分析

私は、歴史研究と現状分析は、相互補完の関係にあると常々考えている。歴史研究と現状分析の大きな違いは、歴史研究の場合その後何が発生したかを知っている人間が研究しており、現状分析は将来何が起こるか知りようがない人間が研究していることである。歴史研究は、「神様」がやっていて、現状分析は「タダの人」がやっているくらいの違いがある。

ところが、歴史研究の時に非常に重要なのは、歴史上の当事者にとって当時の状況が「現状」であったということを忘れないことである。人々は常に幾つにも枝分かれしている将来をにらみ、不完全な情報を元に、限られた時間の中で決断を迫られる。歴史研究をする場合、まさにそうやって「現状分析」をしている当事者に「寄り添う」ことが必須となる。それができなければリアルな歴史研究はできず、研究者の「後知恵」になってしまいかねない。つまり、現状分析のセンスがある方が歴史分析はやりやすいのである。

同時に、歴史研究をしている人は、現状分析がやりやすい。過去の事例から似たパターンを探し出すことが容易だからである。ここまで書けば聡明な読者は気がつくと思うが、2012年夏以来、日中両国は、尖閣諸島（中国名、釣魚島。台湾名、釣魚台）を巡って深刻な対立状況にある。中国は武力による威嚇に初めて踏み込み、政府公船による領海への侵入や、政府の航空機による領空接近・侵犯さえ起こしている。

尖閣諸島問題は、主権に関わるため双方が譲歩不能な問題である。おそらく日中関係は、かつて中台が陥ったように、長期にわたる不愉快で不毛な対立を続ける段階に入った。ただし、そのことは改善のチャンスが訪れないということを意味しない。2013年3月の全国人民代表大会で中国政府の主要人事が確定した後、日本との対立が自らに不利であり、日本との協力こそが国益に資するという判断に傾けば、関係改善のチャンスは必ず訪れる。そしてそれは長続きせず、関係の改善と悪化は繰り返される可能性が高い。



松田 康博 (まつだ やすひろ)

生年月日 1965年11月29日

【専門領域】東アジアの政治と国際関係

【著書】

『台湾における一党独裁体制の成立』慶應義塾大学出版会、2006

(編著)『NSC 国家安全保障会議・危機管理・安保政策統合メカニズムの比較研究』彩流社、2009

川島真、清水麗、松田康博、楊永明『日台関係史 1945 - 2008』東京大学出版会、2009

【所属】東京大学大学院情報学環教授(東洋文化研究所から流動)

【所属学会】アジア政経学会、華僑華人学会、慶應法学会、国際安全保障学会、東方学会、日本現代中国学会、日本国際政治学会、日本台湾学会